

エペソ人への手紙5章21節－6章9節 「互いに従い合う生活」

1A キリストへの恐れ敬い 21

2A 妻と夫 22－33

1B 夫に従う妻 22－24

2B 妻を愛する夫 25－33

1C ご自身を献げられたキリスト 25－27

2C ご自分のからだを愛されるキリスト 28－30

3C 結婚の奥義 31－33

3A 子どもと父 1－4

1B 親に従う子ども 1－3

2B 子を訓戒する父 4

4A 奴隷と主人 5－9

1B 主人に真心から仕える奴隷 5－8

2B 公平に取り扱う主人 9

本文

エペソ人への手紙5章を開いてください、21節から見ていきます。今日は、5章だけでなく、6章9節まで読んでいきます。これまで、私たちは、パウロが「歩みなさい」という勧めのところを見てきました。召しにふさわしく歩みなさい、異邦人のように、むなしい心で歩んではいけないと勧めました。そして、愛のうちに歩みなさい、光の子として歩みなさい、さらには知恵のある人のように歩みなさい、という勧めです。歩みなさい、つまり、このような生活をしなさいという勧めでした。

1A キリストへの恐れ敬い 21

そして21節から、「従いなさい」という勧めになります。私たちの周りにある、いろいろな関係において、従いなさい、という勧めをしています。

²¹ キリストを恐れて、互いに従い合いなさい。

これが、すべての関係に貫かれている教えです。キリストを恐れ敬って、互いに従い合うということです。午前礼拝でお話をしましたが、キリストご自身が、父なる神に従われることによって、一つとなられていました。父なる神も、ご自分の子を愛して、ご自分のすべてを子に任せ、ご自分のことを示されています。それで、父と子が一つになっており、それで神は唯一の方なのです。贖いの働きは、この交わりの中に私たちすべてが、他の被造物も含めて入ることなのです。「1:10 時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つ

に集められることです。」父の権威の下に子が自らを従わせているのですが、父も子を愛することにおいて、ご自身を従わせていると言えます。互いに従っています。

こうしたことが「キリストを恐れて」という言葉に表れています。恐れる、という言葉はパウロが使っているのは、従うというのが、自らを、その権威の下に置くということです。服従することですね。従うという言葉には、ついて行く、という意味合いもありますが、ここではそういう意味ではなく、服従するという意味です。

実は、これこそが信仰の核心部分と言ってもいいかもしれません。百人隊長が、イエス様に、彼のしもべを中風から癒やしてほしいと懇願します。イエス様が、そこに行こうとされますが、そんな屋根の下にお入れする資格はないと、へりくだります。そして、ただ、おことばだけをくださいと言います。それから、権威について語るのです。「マタ 8:9 と申しますのは、私も権威の下にある者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。」主のことばについて、それを理解するのではなく、主にすべてを任せて、信頼して、それで、それに従うのです。そうすると、その命令が実行されます。つまり、みことばがその通りになるのです。この権威系統が、信仰の本質です。

イエス様は、ご自身をしもべの姿を取られることによって、弟子たちに手本を示されました。弟子たちの足を洗われました。そして、言われました。「ヨハ 13:14-15 主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです。」互いに足を洗う、つまり仕え合います。

ですから、これから「従いなさい」という勧めを聞きますが、それは、一方向だけでないことを知る必要があります。一方だけが従うのではなく、互いに従い合うのです。

2A 妻と夫 22-33

1B 夫に従う妻 22-24

²² 妻たちよ。主に従うように、自分の夫に従いなさい。²³ キリストが教会のかしらであり、ご自分がそのからだの救い主であるように、夫は妻のかしらなのです。²⁴ 教会がキリストに従うように、妻もすべてにおいて夫に従いなさい。

午前礼拝にて、神は、男女の結びつき、結婚をご自分の創造の時から定めておられました。そして、それはキリストと教会の関係をすでに含んでいることを学びました。主に従うということ、また教会がキリストに従うということ、夫婦という関係において貫いていくこととなります。私は、主イ

エスに従うことを、どのように証しすればよいのでしょうか？それは、自分の夫との関係において実践することで、証しすることができるのです。もし、自分が連れ添う人を今、女性の方が探しているなら、「自分がイエス様に従うように、従う人でしょうか？」という祈りをされると良いと思います。

ここで、忘れてはいけないのは、夫に従うというのが、一方向ではないということです。双方向、互いに従うということがあって、初めて女の人は夫に従うことが自ずとできます。それは、次に出てくる、夫に愛されるということです。自分が夫に愛されているということを知っていれば、妻は、夫を敬い、とことんまで従うという意欲も出てきます。神の男女の創造の時に、そもそも女が助け手として造られたことを思い出してください。男の骨の骨、肉の肉なのですから、男がしっかり愛することにより、妻を守れば、とことんまで従います。また、相手が不信者であっても、従う姿を見せることで、男を神のものにすることができると、ペテロが第一の手紙で話しています(3:1-2)。従うことによって、神の創造の目的を徹底的に発揮するのです。

キリストが教会のかしらであるように、夫が妻のかしらであるということも、これが上下関係であるとか、従属関係でないことは明らかです。最終的な決断を夫が下すという意味での、かしらであります。夫婦の中で夫が決断をすること、つまりリーダーです。カルバリーチャペル・コスタメサの牧者ブライアンさんの奥さんは、シャーリーさんと言います。日本人牧師の奥さんに期待するような、一歩下がって控えめというのとは、程遠い存在です。ブライアンさんは、あまり多くを語らず、物静かですが、シャーリーさんは、弾丸のように話します。彼女が主導権を握っているように誤解する人たちがいるでしょうが、決してそうではありません。彼女は、夫と自分の関係をこのように話します。「私は、車の助手席に座って、ナビをします。夫は、運転席にいて、ハンドルを握っています。私が、こっちに道に行って、あっちの道にいて、と指図します。けれども、最終的に責任を持つのは、運転手である夫です。」そうです、最終責任を負っていないのです。この決断を任せるのが、妻に役目でしょう。ただ夫の言うことを盲目に聞き従うのではなく、いつもは双方向で会話しているのです。そして最終的に何かを決めるのは、夫であります。

2B 妻を愛する夫 25-33

1C ご自身を献げられたキリスト 25-27

²⁵ 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。

夫については、キリストが教会を愛されてご自身を献げられたように、妻を愛します。これは結局、自分のためにもなるのです。先ほど話しましたが、妻は、自分が守られていること、養われていることに安心を持ちます。愛されていることが分かれば、彼女は助け手として神に造られているのですから、とことんまで、自分がイエス様に従っていくのに、従ってくれるのです。

牧者チャックは、カルバリーチャペルの牧師となるまでは、何年もの牧会生活で、不毛に感じた道を歩んでいました。けれども、最後に牧会していた教会は、成功しているように見えました。ところが、チャックは、カルバリーチャペルという、もう間もなく戸を閉じようと考えていた教会から、招聘の話があったことを妻のケイに告げました。チャックと共にとてつもない苦勞をしてきたのが、ケイです。彼女は気が狂ったのか？と思いました。なぜ、今、自分たちの働きにようやく、実が結ばれてきたと思っていたのに、再び、いやこれまで以上の、将来性のない集まりのところに行くのか？けれども、チャックは、そこに主の導きを感じていました。ケイは、精神科の先生に頼んで、夫の精神状態を診てもらおうことさえしました！そんな時、チャックが帰宅したら、玄関のところで、泣きじゃくっているケイがいました。「どうしたの？」と尋ねると、「主が言われたの、『夫に従いなさいって』」。チャックは、「ああ、それは良かった。その招聘に応募するかどうか、もう決めなきゃいけないんだ。」と言いました。ケイは、「もう、その話は聞かせないで！自分の決めたこと、また心が揺らいじゃうといけないから！」そうなんです、思いでは全く、反対しているのですが、ただ、主の言われたことに従わないといけないと思いました。

キリスト者の夫婦については、私はいつもこう話しています。「とことんまで、イエスを主として、従っている夫に、とことんまで従ってくれる妻」。妻にとって、夫に従うのは、夫そのものに従っているというよりも、夫の背後で働いておられるイエス様に従っているのです。夫を通して、主が働いているのを見ます。ですから、夫に従属しているとか、そんな風に見えないのです、夫を通して、そのままイエス様に従っているのです。

しかし、そのためには、彼女をキリストが教会を愛されたように、愛し、養い、守る必要があるのです。自分のことを考えてみてください。もし、主が愛されずに、ただ、いのちを捨てるまで従いなさいと命じられたら、どうですか？奴隷でしかありません。けれども、愛しているから、すべてをイエス様に献げたいと願うはずです。そして、その愛は、イエス様が初めに、私のために神に全てを献げてくださり、私を愛してくださっているからこそ、与えられているものです。そのことが分かれば、「妻が私に従ってくれない」という葛藤や焦燥感について、よく考える必要があります。それは、彼女が自分に愛されているという保証、安心感がないからではないか？という反省です。

そして、妻は、次のことを考えてください。アダムが園を耕し、動物に名を付けている時に、つまり働いている時に、ひとりの助け手として与えられたのが妻だということです。男は、このように、神のかたちとして、自分が働き、管理している時に、その尊厳が与えられています。自分の最も近い人、伴侶に、彼のしていることを支えてください、ほめてください。人間的にいうと、男は「単純馬鹿」です。共にいる人に、そのしていることに応援をしてもらえると、自分の、男であることの意味を見いだします。そして、自分の妻を愛し、養うことが本懐であることに気づきます。主に従い、主にあっての働きをするところに、妻がいっしょにいてくれるのです。

このように、徹底的に夫に従う妻と、徹底的に妻を愛する夫、それががっちり結ばれると、いわゆる一体化した夫婦、そしてそれが、キリストが教会をご自分のからだとされるほどに、一体化した姿を映し出します。

²⁶ キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、²⁷ ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

午前礼拝でお話ししましたように、キリストは花婿で、教会が花嫁であることを教えています。ここにある、「しみや、しわや、そのようなものが何一つない」というのは、まさに花嫁が花婿の前に出ていく時の姿です。使徒たちは、数々の勧めで、私たちが主の来られる時に、傷のない者として出られるように、という言葉を行っています、それは花嫁が花婿の前に立つことを思い描いているからです(ユダ 24 等)。パウロは、コリント第二においても、「11:2 私はあなたがたを清純な処女として、一人の夫キリストに献げるために婚約させたのですから。」と教会を呼んでいます。

しばしば、教会の携挙は大事な教えではないというのが、キリスト教会にあります、私は驚いて愕然とします。主が、教会をご自分の父の家に迎えるために、つまり婚姻と婚宴のために引き取りに来ることこそが、教会の激烈に慕うことなのではないでしょうか？そして、この待望自体が、私たちを清めます。「Iヨハ 3:2b-3 しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」

そして、ここでは、その清めが、「みことばにより、水の洗いをもって」ということによって、行われます。イエス様が言われました、「ヨハ 15:3 あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、すでにきよいのです。」イエスがお語りになることばが、いかに私たちを聖めて、栄光の教会となっていくか知れません。

2C ご自分のからだを愛されるキリスト 28-30

²⁸ 同様に夫たちも、自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する人は自分自身を愛しているのです。²⁹ いまだかつて自分の身を憎んだ人はいません。むしろ、それを養い育てます。キリストも教会に対してそのようになさるのです。³⁰ 私たちはキリストのからだの部分だからです。

パウロは、キリストが教会のために献げられた、と話していましたが、ここではさらに、キリストが教会をご自分のからだとされているという、「からだ」の部分に注目しています。私たちは、コリント第一 12 章にて、からだは、それぞれがいたわり合うものだとすることを学びました。「それは、から

だの中に分裂がなく、各部分が互いのために、同じように配慮し合うためです。(26 節) 同じように、夫は妻を、自分のからだのように愛しなさいということです。

私は、ここの箇所では妻を愛するとは、どういうことなのかを新婚生活の時に学びました。単に愛しなさい、ではなく、自分のからだのように愛するということです。男は、女の人のように繊細ではありません、鈍いです。女の人が、「なんか寒い、凍え死ぬ！」と感じている時に、「うん？ ああ、なんか寒いな〜。」というように鈍いのです。そして、親切にするというのは、その人のために何かを考え、解決方法を与えることです。だから、妻が何か話していると、自分が解決方法を与えなければいけないと気負って、説得しようしたり、議論してしまいます。後で、「ただ、聞いてほしいのに…。」と言われて、善意が全然、善意ではなく、意味のないことをしていたことに気づきます。

それで気づいたのです、「ああ、自分自身を養っている、愛していることを思えば、よくわかるじゃないか！」ということです。鈍い私でも、自分のからだのことには敏感です。お腹が減ったら、何か食べたいな〜って思います。一人ひとり、その感覚は違いますね、私は、夕食後にお菓子でも何でも、食べると気持ち悪くなってしまいます。けれども、なぜかお昼ご飯が近づくと、お腹が空いて来て、ちょっとお菓子を食べてしまうことがあるんですね。そうやって、自分の身を愛し、養っているのです。そういった身体にある感覚をもって、妻といっしょにいることなのだ、と分かりました。

ペテロも、同じようなことを第一の手紙で話しています。「3:7 同じように、夫たちよ、妻が自分より弱い器であることを理解して妻とともに暮らしなさい。また、いのちの恵みとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。そうすれば、あなたがたの祈りは妨げられません。」自分より弱い器というところですが、これは言い換えると、もっといろいろなことを感じるということです。もっといろいろな生理的、身体的必要があるということです。だから、「ともに暮らしなさい」という勧めになります。

3C 結婚の奥義 31-33

³¹「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」³² この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。

ここの箇所は、聖書というものをどのように読んで行けばよいかの、一つのヒントを与えます。神の壮大なご計画において、キリストにあって人々を一つに集めるということが、創世の初めからみこころとして抱いておられるということです。教会は確かに、五旬節にて聖霊が弟子たちに降られてから、ペテロが説教をしてユダヤ人たちがバプテスマを受けた時から始まりました。けれども、それは目に見える形に、御霊が現してくださったのですが、神のご計画には、キリストと教会の関係は創世の時から、みこころの中で準備されていたということです。

神がイスラエルを選ばれた時も、ご自身を夫、イスラエルと妻としての誓約として語っておられま

した。イスラエルが異なる神々を拝んでいると、それは姦淫をしているとして、主は咎められました。そして天のエルサレム、神の都がどうなっているかを思い出してください。そこは、土台には十二使徒の名が記された、宝石が使われています。けれども都の城壁の入口には、東西南北、四方にそれぞれ三つの門があり、イスラエル十二部族の名が記されているのです。神の民として、教会だけでなく、初めから愛され選ばれていたイスラエルも、その都の中にいることを示しています。こうやって、夫と妻という関係が、いかに神のみこころの中に大きな部分を占めているかがわかります。

³³ それはそれとして、あなたがたもそれぞれ、自分の妻を自分と同じように愛しなさい。妻もまた、自分の夫を敬いなさい。

話を夫婦関係に戻してまとめていますね。夫はそれぞれ妻を自分と同じように、愛す。妻は妻で、自分の夫を敬います。大事なものは、それぞれが、それぞれの命令に注目することです。夫は、「妻はなかなか自分に従ってくれない」と言って不平不満を言っているのではなく、そんな暇があるなら、「自分自身は妻を、愛しているだろうか」と問うべきだし、妻は、「なぜ、私のことを見てくれないのかしら」ということではなく、「いかに、夫に従っていくべきだろうか」と問うべきです。自分に与えられた命令を守ることによって、すぐに良循環が来ます。夫が妻を愛せばそれだけ、妻は従います。妻が従えばそれだけ夫は愛します。

3A 子どもと父 1-4

次にパウロは、親子関係を語ります。この順番が大事ですね、夫婦あつての親子です。順番としてもその通りですが、優先順位としてもその通りです。夫婦関係が良いことが、親子関係に良い影響をもたらします。

1B 親に従う子ども 1-3

¹ 子どもたちよ。主にあつて自分の両親に従いなさい。これは正しいことなのです。

まず、子どもたちに書いています。ここでのテーマは、「従いなさい」ということだからです。ただ、ギリシア語は異なります。妻が夫に従う時は、服従するという意味合いの言葉です。ここでは、従順であるという意味合いの「従う」です。服従は、相手をリーダーとして認め、それで、その決断にゆだねるという意味合いで、自分自身の主体性、自主性が重んじられています。従順は、自分が理解できていなくとも、それでも、「ただ、言われているから」という理由だけで従うということです。

そしてこれを、「正しいことなのです」と言っています。自分たちの生きている、ギリシア・ローマ社会でも、同じように、子どもが親に従うことは正しいこととされていました。しかし、次、4節でパウロが言及していますが、親はしばしば、子に体罰を与えたりして、子どもを怒りを抱かせる形で従わ

せていることが、よくありました。それで、子どもは、両親に従うということが果たして正しいことなのか？と疑問に思ってしまうことがあるかもしれません。

私たちの教会で、あるアメリカ人の宣教師の人が、子ども礼拝のお手伝いをしてくださいました。その時に、とても良いことを教えていました。「ただ、文化や習慣で、親を敬いなさいというから敬うのではなくて、聖書が、あなたの父と母を敬いなさいとあるから、神が命令されているから、敬うんだよ。」と言っていました。そうなのです、キリスト者は、周囲の人々がしているから自分も当たり前のようにするのはなく、主がそう言われているから、という理由で行うのです。

それでパウロは、「[主にあって](#)」という言葉をつけ加えていますね。主イエスに従っているから、君もお父さん、お母さんに従うんだよ、ということです。イエス様について、ルカの福音書が、12歳の時のことを書き記していますね。親の言われたことを守っているイエス様の姿が出てきます。親を敬うことは、主に従っていることなのです。

ここで例外は、もちろんあります。夫婦関係にもあります。そして次に出てくる、主人と奴隷の関係にもあります。自分にとって、神が置かれているはずの夫、また親が、または主人が、神に対して罪を犯すようなことを命じる時に、それに従うべきか？ということでもあります。答えは、ペテロが福音を伝えていることで、それをやっはいけないと命じられた時に、「[使徒 4:19 神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従うほうが、神の御前に正しいかどうか、判断してください。](#)」ダニエルが良い例でしょう。彼は、その忠実さで、バビロンのネブカドネツアルにも、メディアのダリヨスにも高く評価されていました。彼は、それぞれの王を敬っていました。けれども、王のごちそうは食べませんでした。ダリヨス以外の、天の神に祈りを献げました。

親が、例えば、嘘をつきなさいという命令を子にする時に、それはできないと子は拒むことができます。親が、暴力や、性的いたづらをするのが、教会が知ったのならば、警察に通報しなければいけません。そこで、子は親に従うべきというたわけたことを、言うてはいけません。犯罪の加担者になります。主にあって、親に従うのであり、主イエスは、小さき者をつまずかせるならば、首にひもをくわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましだと言われたのです。

²「あなたの父と母を敬え。」これは約束を伴う第一の戒めです。³「そうすれば、あなたは幸せになり、その土地であなたの日々は長く続く」という約束です。

モーセの十戒を、パウロは取り上げています。「あなたの父と母を敬え。」は十戒のうちの、第五番目の戒めで、真ん中に来ています。第一から第四までは神と人との縦の関係であり、第六から第十までは人と人との横の関係であります。この間に挟まれるようにして、この「父母を敬え」という戒めがあるのです。これが何を意味しているかと言いますと、親は子どもにとって、神の代表者

であるということです。子どもは親をとおして、神がどのような方であるかを知ります。子供は親に従うことによって、神に従うのです。

そして、それは約束がともなっていることを教えています。幸せになり、日々が長く続くとありますが、当時、イスラエルでは、モーセの律法によって、反抗的な子には石打で殺さなければいけないという処罰がありました。ですから、文字通り長生きできるという意味でしたが、パウロがここで言いたいのは、むやみに従えと神は言われているのではなく、約束をともなった命令だよ、ということです。自分の幸せのためになる、ということでしょう。

2B 子を訓戒する父 4

⁴ 父たちよ。自分の子どもたちを怒らせてはいけません。むしろ、主の教育と訓戒によって育てなさい。

子どもたちが父に従うだけでなく、双方向です。父は、子を主の教育と訓戒によって育てる義務があります。「怒らせてはいけません」というのは、先ほど話したように、むやみに罰するような風潮が、ローマ社会にはありました。けれども、それはしてはいけないということです。父は、その権威をふりまわすのではなく、「主の教育と訓戒によって育て」るのです。

主の教育と訓戒とは、自分自身が主の教育と訓戒の中に生きていることによって養われます。その手本、生き方を見せることによって、初めて、子どもたちが従順になることができます。イエス様が弟子たちを教育し、訓戒されました。子どものようにふるまっていた彼らは、大人として生きることが出来ました。よみがえられた後に、ペテロに対して、イエス様は言われました。「ヨハ 21:18 まことに、まことに、あなたに言います。あなたは若いときには、自分で帯をして、自分の望むところを歩きました。しかし年をとると、あなたは両手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をして、望まないところに連れて行きます。」

そのことによって、ペテロまた他の使徒たちは、初めて信者たちを教育し、訓戒することができました。ペテロの第一の手紙には、数々の勧めがあります。しかし、その中には彼自身が、大失敗をしてできなかったものもあります。迫害の中で苦しみを受けている時の、みこころを語っていますが、彼自身がカヤパ邸でイエス様が裁判を受けておられた時に、この方を三度も否定したのです。つまり彼は、神の恵みによって、へりくだった心でそれらの勧めを行っています。

4A 奴隷と主人 5-9

1B 主人に真心から仕える奴隷 5-8

⁵ 奴隷たちよ。キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。

奴隷と主人の関係に対する勧めです。ここも同じく、奴隷に従いなさいというだけでなく、主人に対しても、公平に取り扱うことを9節で教えています。双方向です。

奴隷制度は、ローマ社会の中で大きな部分を占めていました。帝国全体では5人のうち1人が、都ローマの周辺では、3人に1人が奴隷でした。自由とは、すべての人に与えられるものではなく、自由人という特権階級の人だけでした。ローマ市民は、ごく一部だったのです。そして奴隷は、見えない存在でした。善悪ではなく、生活の必要として、まるで見えないもののようにして取り扱っていました。これが日本人に良く分かるのが、「テルマエ・ロマエ」ですね。古代ローマの浴場を造る技師が、ひょんなことから現代日本へタイムスリップします。そこで、日本の風呂文化を目にするのですが、電気で動いているものには、ものすごく反応しています。扇風機とか、ウォッシュレットとかです。すべて機械化しているものは、かつてはすべて奴隷が行っていました。エペソに行った時に、公衆便所の遺跡がありましたが、そこでガイドさんが、奴隷が、主人が来る前にそこに座っていて、座るところを前もって温めるのだそうです！まさに、温める便座です。

今の職場とて、私たちは、働いている人々がまるで、何も見えないものであるかのように、働かされているのではないのでしょうか？その中に、キリスト者は同じことをしていても、「キリストに従う」という大きな目的と意義があるのです。「恐れおののいて」と言っていますが、これは、最大限の尊敬を持って、と言い換えるとわかりやすいでしょう。主人に仕えることは、キリストに愛されて、この方にすべてを献げた者、キリストの奴隷にとっては、大いに分かることです。最大限の畏敬をもって、キリストに仕えています。その心をもって、主人に仕えなさいと勧めているのです。

ところで、奴隷は主人にとって所有ですから、殺しても何をして、主人には権利があります。その中でパウロが、主人に対しても勧めを行ないます。これは、ローマ社会の中ではとんでもないことです。新約聖書は、どうして奴隷制度を廃止させなかったのか？という問いかけが、時々あります。奴隷制度を廃止させることよりも、そこにいる一人ひとりの、キリストにある尊厳を取り戻すことのほうが、もっとも大切で、仮に制度を廃止する運動を政治的にしようとしたら、血みどろの戦争になっていたことでしょう。それは、神のみこころではありません。キリストにあって、ひとりひとりに関わっていくことが、みこころです。

奴隷は奴隷で、このように物として取り扱われていましたから、心から仕えることなどできません。しばしば、主人の見ていないところでは怠慢になっていました。脱走する者たちが数多くいました。ピレモンの手紙は、ピレモンから逃げて行ったオネシモがパウロに出会い、そこでキリスト者となったのが背景となっています。このようなところで、奴隷たちに対しては、「真心から」仕えることができるのです。キリストの奴隷となったキリスト者は、真心から仕えることをよく知っています。

⁶ ご機嫌取りのような、うわべだけの仕え方ではなく、キリストのしもべとして心から神のみこころを

行い、⁷ 人にではなく主に仕えるように、喜んで仕えなさい。

奴隷という労働の現場において、パウロは、そこにおいても、キリストに仕えるという、神の国の広がりを求めています。結婚という現場において、キリストと教会の姿が貫かれていたように、奴隷の働きにおいて、アダムが罪を犯す前に、働いていたごとく、キリストのしもべとして心から神のみこころを行う、神の国が貫かれているのです。そこには、奴隷制度の中では、ご機嫌取り、うわべだけの仕え方が当たり前であったところで、真心から仕えるという、仕事にある尊厳の回復が行われています。

そこで大事なのが、「人にではなく主に仕えるように、喜んで仕え」ということです。イエス様が、山上の垂訓で、人に見せるために善行をしないようにしなさいと言われて、隠れたところで行うことが、天の父が見ておられて、報いを与えてくださることを教えていました。人に対して行っていると思っているところから、主に仕えていると知ると、その相手がどのようなことをしていようと、影響されることなく、いつでも忠実に仕えることができるのです。しかも、いやいやながらでなく、喜んで仕えることができます。今は、日本には奴隷制度はありませんが、職場において十分に適用できる教えですね。教会においてさえ、適用できます。主に対して奉仕します、人に対してではありません、これは奉仕の務めの鉄則です。

⁸ 奴隷であっても自由人であっても、良いことを行えば、それぞれ主からその報いを受けることを、あなたがたは知っています。

これは、奴隷と自由人を完全に解放するような教えです。奴隷であっても、自由人であっても、そこに貫かれているのは、主ご自身に仕えるという、神の国です。そこで良いことを行っていれば、主はその報いを与えてくださるのです。お仕事をされている方々は、その現場もまた、神の国に関わる場なのだということを思えば、喜んで取り組めるのではないのでしょうか。

2B 公平に取り扱う主人 9

⁹ 主人たちよ。あなたがたも奴隷に対して同じようにしなさい。脅すことはやめなさい。あなたがたは、彼らの主、またあなたがたの主が天におられ、主は人を差別なさらないことを知っているのです。

主人たちに対する教えです。先ほど申し上げたように、これはローマの奴隷社会の中では、あり得ないことでした。奴隷に対しては何を行っても構わなかったのです。脅すのは当たり前です。ところが、主人は主人で、自分の主に対して申し開きをしなければいけないのです。天に主がおられます。ある人が言いましたが、人を治めることのできる能力は、自分がいかに治められているかを知っていることによる、ということです。王であれば、自分の上に天に王がおられ、その方にいか

にひれ伏しているかによって、自分の下にいる者たちを従わせることができる、というものです。

そして、「主は人を差別なさない」ということです。ここに福音があります。福音は、すべての人を神の前で平等にします。地上の制度はそのままあります。しかし、その制度に囚われることなく、その場、その場で、キリストと教会の関わり、主キリストに仕えることによる神の国の広がりにおいては、何ら変わらないのです。主を知り、主に仕え、主に従うということにおいて変わらないのです。みなさんが専業主婦であっても、学生であっても、お仕事を持っているにしても、どこにいても、キリストを主として、この方に愛され、この方に仕えるのです。これほど、単純明快なことはありません。これが、従うところにある喜びあり、恵みです。